子ども達とのこと

島田　久美

一昨年、昨年と年少から年長への持ちあがり担任を経験して、今年の春、再び年少組の担任となりました。男児十名、女児十四名のうち、ちょうど半分が「〇〇ちゃんの弟」「△△ちゃんの妹」といったお馴染みさん。「ふーんあの子がもう…。」と幼児個人票をしげしげと眺め、また新顔達のイメージを楽しくふくらませながら、新年度の準備を進めてきました。

お天気が心配された入園式の日は、まぶしい程の青空に恵まれ、「今日からうめ組だよ。仲良くしようね。」と一人一人の園服の胸に赤い名札をつけて、二十四名プラス一の生活がスタートしました。お母さんの体の陰に隠れるようにちょこんと立っていた顔も、日ごとに一人前の幼稚園児らしくなり、潜んでいた腕白ぶりも全開。四歳児の型にはまらないパワーに触れ、二年ぶりの感触をたぐりよせてはみるが、いやいや、今年の子は手強い。幼さゆえの強さも脆さもむき出しで、ケンカをするのも、泣くのも、笑うのも、しょげ返るのも、憎たらしいのも、かわいらしいのも体いっぱい。その子ども達と一緒にあたふたしながら、笑ったり怒ったり、楽しんだり落ち込んだりして

いるうちに、一学期が過ぎていきました。

今、子ども達との生活の喧騒から一歩離れ、一学期を振り返ってみますと、どの子も、新しい環境の中で教師を拠り所にして安定しようとし、健気に自分の道を探ろうとしていたのだなと感じられます。教師の所在や動きに敏感に反応し、もっと自分に目を向けてほしい、もっと自分をわかってほしいと訴えている子ども達。その表し方は様様で、受け入れられやすいやり方で出す子もいるし、大人から見て〝マイナス〟の動きをする子もいる。ストレートに出す子もいるし、遠まわしに出す子もいる。でも、それら全てを子どもからの信号としてまず受け止め、子どもの心に沿って的確に返すことができただろうか。日々の慌しさに紛れ、小さいけれど大切なことを見落として、小さな心を傷つけたことも多かったのではないかと反省しています。年少の一学期は、一人一人の子どもとの関係の基盤を作っていく大切な時期であり、安定して心を開いていく子どもの姿をゆっくり見守る時期です。一学期間かかって私にそれを教えてくれたM子のエピソードを次に紹介したいと思います。

M子は、女児の中で生まれが一番遅く、きゃしゃな体つきと幼児音のやや残る舌足らずなしゃべり方が、無防備な幼さを強く感じさせます。

入園前の秋の面接の日、母親から離れて保育室に入った途端に大パニック。二つ下の弟と互いの服の裾をしっかりと摑み合ったまま、怯えた顔で部屋中をぐるぐる逃げ回り、どんな言葉かけもはね返さんばかりの奇声を発します。母親に一緒に保育室に入ってもらっても落ち着かず、「おんも行く。」とテラスへ。室内に他の子ども達がいたことで、閉鎖的な圧迫感を保育室に感じたのでしょう。テラスで「おうち帰る。」とべそをかいた後、「せっかく来たんだから、一つだけでも遊

ぼうよ。おすべりは好き?」という教師の誘いに少し心が動いたよう。「待っててね、待っててね。」と母親を振り返って念を押しながらすべり台へ。一回すべるとにこにこしてもう一度階段を上る。が、すぐにまた不安気な顔になり急いですべり終えると、母親の所にかけ戻りました。

職員室ではM子のことが話題になり、入園後しばらくは大変だろうと予想されました。そして、いよいよ入園式の日。式後、保護者はホールに残って簡単な説明を聞き、子ども達は年長児に連れられて自分達の保育室に一足先に行くことになっているのですが、M子は年長組の女児が目の前に差し出した手をすんなりと握り返し、しっかりと手をつないでホールを出ていきました。これには、私達の方が「えっ!?」。M子にとっては、わけがわからないなりに自然な流れだったのでしょう。

翌日からの様子もやはり、わけがわからないままに園に来てしまっているといった感じで、泣きはしないものの、そこにいるだけで精一杯といった様子が伺えました。室内よりは園庭にいることが多く、砂場の用具入れにちょこんと収まって座りこんでいる日が続きました。そして、私が声をかけても、どう反応していいのかわからないような困ったような曖昧な表情で、体を硬くしていました。

子ども達にも私にも少し余裕が出始めた四月の終わり、誕生会の中で『アブラハムの子』という踊りを皆ですることにしました。教師の動きを真似ながら身振り手振りを愉快につけていく子ども達の姿を見ているのがわかりました。手遊びや歌の時もじっと見ているM子でしたが、この時は楽しい振りにつられて思わず気持ちが一緒になったような見方。M子と目が合う度に、恥ずかしそうなでも嬉しそうな笑顔が見え、M子の心へつながっていく道が見え始めた瞬間でした。

ある日、他の子どもと砂場で遊んでいた私の後ろへM子もやってきて、しゃがんで砂をいじり始めました。小さな手でギュッギュッと砂を握っています。「あれ、Mちゃん、お団子作ってるのかな。」と声をかけると、にこにこ笑って答えません。私が更にM子の顔をのぞき込むと、M子はますますにこにこして、手に握った砂をとても嬉しそうに「うんこ！」と差し出すではありませんか。それが、M子が初めて自分から私に面と向かって言った言葉だったのです。どんな風に返したらいいのかと一瞬思いながらも「えっ、Mちゃんのうんこなの。ふーん。」と受け取ると、にやっと笑って「ちあうよ。」「じゃ、誰のだろう。」「……わんわんの。」「わんわんのうんこ、どうしよう。」と首をかしげて見せると、「……ここに埋める。」と砂場の隅を指さすので、二人で穴を掘って埋めました。この〝わんわんのうんこ〟の遊びはM子の気に入ったらしく、その後も何度か繰り返されました。

園内でM子の笑顔が多く見られるようになってくるのと同時に、ふわふわしていたのが急に我に帰るかのように泣くことも多くなりました。遊ん

でいる途中で「おうちに帰るよー、おうちに帰るよー。」としくしくし始めますが、その立ち直りも早くなりました。少しずつ、自分の周りが見えてきている、そんな感じでした。

いつも登園時間の早いM子ですが、朝、他の子ども達が来る前のひとときが安心して私とのおしゃべりを楽しめる時間のようです。「パパと来たの。会社、近くなの。」「Y（弟）ねえ、足ぶつけて痛くしたの。」「きのう髪の毛切ったの。前だけ。」「きょう、すいか食べたの。」自分の身の回りの出来事を伝える言葉がM子の「おはよう」代わりになりました。また、私に向かってぶったり蹴ったり、いけないと承知のことをわざとしてみせたりなど、私がどんな反応をする人間なのかを試し、そこから生じる触れ合いを求めているようでした。

自分の周りの物への興味も増してきて、紙類、ハサミ、のり、ホチキスなどの試しそのものに黙々と取り組んだり、園庭の虫探しに熱中したりする姿が見られるようになりました。園内で安定できる場や過ごし方を見つけたようです。

一学期末、M子の母親が「幼稚園がとても好きみたいです。中でも先生が一番好きなんですって。」という話を聞かせてくれました。教師にとって何よりの励みとなるのは、「幼稚園が好き。先生が好き。」という子どもの思いです。その思いを裏切らないようにしたいものです。そしてまた、「子どもって面白いな、不思議だな、すごいな」とわくわくできる楽しさを、いつまでも自分の中にもっていたいと思います。

（杉並区立方南幼稚園）